

研究ノート

欧米で拡大する反宗教的組織の現状

藤井修平

はじめに

西洋諸国の中でも宗教的と言われてきた米国も、21世紀に入ると「無宗教」を自認する人が増加してきている。2014年のピュー・リサーチ・センター (Pew Research Center) の調査によると「無宗教 unaffiliated」の米国民の割合は22.8%に上っており、7年前より6.7ポイント増加している。このような急速な無宗教の拡大の原因の一つとしては、近年さまざまな面で宗教の影響力からの脱却を目指す「反宗教的思想」を掲げる組織の活動が目立ってきていることが考えられる。本稿では欧米で進んでいる無宗教化の実態を明らかにするために、反宗教的思想を推進する組織の活動状況を、それらの組織の刊行物と調査により得られた資料から分析する。

ここで「反宗教的思想」として規定するものは、公的領域から宗教を排除しようとする世俗主義、宗教に対して否定的な姿勢をとる無神論、結婚や葬儀を非宗教的な儀礼で代替することを試みるヒューマンイズムの3種である。これらの概念は相互に重なり合っており、完全に異なったものとして扱うことはできないが、それぞれ宗教に対する政治的批判、理論的批判、実践的批判であると理解することができる。反宗教的思想を推進する組織はこれらの姿勢の1つないし複数を理念として掲げ、それに基づいて活動している。

日本国内において、これまで知られている反宗教的思想はリチャード・ドーキンスの『神は妄想である』やクリストファー・ヒッチンス、サミュエル・ハリスの著作など、宗教に対する理論的・哲学的な批判がほとんどであった。これらは「新無神論」と呼ばれ、それに対する応答であるテリー・イーグルトンの『宗教とは何か』やアリスター・マクグラスらの『神は妄想か?』でもこうした理論的な無神論のみが検討されており、無神論が社会において人々が参与する運動となるまで広がっているのかどうかは議論がなされてこなかった。そこで以下では、反宗教的思想の実践面に重点を置き、無神論とヒューマンイズムそれぞれの組織の活動内容を明らかにしていきたい。

1. 無神論の定義

「無神論」という語にはさまざまな意味があるが、『オックスフォード無神論要覧』では、「神ないし神々が存在するという信仰の欠如 (Bullivant 2013: 13)」と定義されており、さらに「神の存在の否定」を積極的無神論、「神の存在の信仰の欠如」を消極的無神論とする分類もある。このように理解した場合、「無神論」の語が指す対象は、一般的な日本語におけるそれ、例えば「神の存在を否定する思想 (広辞苑)」という意味における無神論よりも広くなることに注意したい。すなわち、「神の存在の否定」が無神論の必要条件ではないということである。実際に、『オックスフォード無神論要覧』収録の国際社会調査プログラムの結果では、「私は神を信じない」とした回答者を積極的無神論者、「私は神がいるかどうかわからず、それを見出す手段があるかもわからない」とした回答者を消極的無神論者として扱っている (Keysar and Navarro-Riverra 2013: 554-555)。また、以下に述べる無神論組織も、不可知論者や懐疑論者など「有神論者ではない」ものはすべて包括して無神論の範疇に入れている。これは、無神論につい

ての議論は一部の宗教に否定的な人だけではなく、「無宗教」の人も対象にしているということである。

2. 「アメリカの無神論者」の活動内容

上記のように定義される無神論であるが、米国において無神論を推進する代表的な組織は「アメリカの無神論者 American Atheists」である。この組織は公立学校での聖書朗読の強制に反対したマダリン・オヘアによって1963年に設立されたもので、現在でも刊行物の出版やさまざまな政治活動を行っている。以下では「アメリカの無神論者」現代表のデビッド・シルバーマンが著した『神と戦う』を参照し、この組織の活動について描写する。

同著によると、「アメリカの無神論者」はいくつかの理念に基づき、その実現のための活動を行っている。第一の理念は、米国憲法修正第1条に規定された政教分離の徹底化である。これは大局的な目標として掲げられているもので、政府が政治的・金銭的に宗教を援助しないことや、政治家が宗教的な発言をしない、宗教を利用しないといったことを指している (Silverman 2015: 28)。こうした目標の達成のために、政教分離に関する違憲訴訟を起こすことが同組織の活動内容の一つとなっている。シルバーマンはスローガンとして「あらゆる宗教は虚偽であり、あらゆる信者は犠牲者である (Ibid.: 4)」という言葉を挙げているが、これは無神論組織の活動の対象が個人ではなく、個々人を束ねる宗教団体や、それを優遇する政府であることを意味している。

そのような訴訟の具体例として、2011年の「アメリカの無神論者対ダンカン」訴訟では、ユタ州の公共空間に置かれた州兵を記念する十字架が違憲であるという訴えを起こし、勝訴を勝ち取った。またフロリダ州のブラッドフォード郡庁舎前に設置された十戒のモニュメントを違憲とした「アメリカの無神論者対ブラッドフォード郡」訴訟では、郡は訴えに基づき設置した団体にモニュメントの撤去を命じたが、団体側がこれに従わなかったため、同時に「無神論ベンチ」を設置することで2013年に和解することとなった (Ibid.: 187-195)。こうした単独での訴訟のほか、宗教の実践に対して州政府などが負荷をかけることを禁じる「宗教の自由回復法」の各州での成立に対してアメリカ市民自由連合 (ACLU) などの軌を一にする組織とともに反対運動を行ってきたことが語られている。同法は2015年4月にマイク・ペンス州知事によりインディアナ州で成立したが、性的少数者への差別につながるとして反対を受け、修正を余儀なくされている。[→『ラク便り』66号56頁参照]

このような訴訟に加えて行われているのが、無神論者の地位を向上するための広報活動である。これは「無神論者が常態となり、われわれへの偏見がやむこと (Ibid.: 136)」を目標として行われているもので、その方法の一つが各地に広告看板を設置することである。今までに出した広告看板には、「あなたはそれが神話であることを知っている」「あなたは神がいないことを知っており、われわれはあなたが正しいことを知っている」等があり、2013年のクリスマスには「誰がクリスマスにキリストを必要とするのか？誰もいない！」という映像広告をタイムズ・スクエアで放送したという (Ibid.: 130-132)。こうした挑発的な広告は「扇動的戦略」のもとで採用されており、これによって議論を呼び起こすことで無神論者への関心が高まるとされている。

「アメリカの無神論者」の第三の理念は、「宗教を尊重しない」ことである。彼らは、宗教者が尊敬され、宗教的発言が重要視されることは、宗教が不当に得ている特権の一つであるとみなしている。シルバーマンはこのように述べる。「宗教者は、あらゆる手段でもって維持される

尊敬という台座の上に宗教を乗せることを求めている。しかし宗教は尊敬に値するものではない (...) 公共の場で宗教への不敬を示すことは、聴衆に対する宗教の影響力を切り崩していくことになる (Ibid.: 83)」。こうした観点から、この組織は宗教への不敬を示すという形で宗教への攻撃を行っているといえる。

こうした攻撃は、キリスト教やユダヤ教に対しても行われているが、とりわけイスラム教へのそれは顕著である。というのも、イスラム教は自らの規則を周囲に押し付けて従うことを強制させ、自由を奪っている宗教だと理解されているからである。その一つが預言者ムハンマドを描いてはならないという規定であり、「アメリカの無神論者」はこれに反対して「ムハンマドを描く日」というイベントを開催している。シルバーマンの主張は以下の通りである。「私はムハンマドを描き、ユダヤ教の神の名を書く。私は、適切だと思ったことは他者の宗教法にかかわらず何でもする。ポリティカルコレクトネスも、宗教の古く恣意的な規則も私を止めることはできないし、あなたも止まるべきではない (Ibid.: 67)」。このような姿勢はきわめて過激であり、マクグラスが述べる「無神論原理主義」に陥っているともとれるが、こうした扇動的姿勢が少なからず支持を得ているという事実は、考慮に入れるべきだろう。

3. 無神論者の実勢

ここまでは「アメリカの無神論者」の理念や活動内容を見てきたが、次に米国の無神論者の実態を把握すべく、『オックスフォード無神論要覧』に収録されている統計資料を示す。2008年のデータでは、米国において無神論者を自称するのは人口の3%である。これに神がいるかどうかかわからないと答える消極的無神論者を加えた値は8%となり、人口にして約1,900万人である (Keysar and Navarro-Rivera 2013: 556, 563)。次に、積極的無神論者と有神論者を各種の属性ごとに比較した値に着目すると、まず平均年齢は、無神論者が約38歳に対し、有神論者は約44歳である。性別は無神論者が男性65.8%と、有神論者の48.2%よりも男性に偏っている。社会階級にはほとんど違いは見られないが、高度な教育を受けた割合は、無神論者が59.8%と、有神論者を14.1%も上回っている。また住んでいる街の規模は、人口50万人以上の都市に住んでいる割合が無神論者は38.2%、有神論者は24.8%と大きく差がついている (Cragun et al.: 604-606)。これらのデータから、米国の無神論者は若い世代、男性、高学歴、大都市に多い傾向があるといえる。この傾向は、世界規模での調査結果とも一致を見せている。データの無い都市の規模についてのものを除けば、前述の国際社会調査プログラムに参加した40ヶ国のうち、39の国で女性よりも男性の無神論者が多く、29の国で大学まで修了した者がそうでない者を上回っている。また15歳から34歳までと60歳以上を比較すると、29の国で前者の無神論者の方が多い (Keysar and Navarro-Rivera 2013: 565-572)。

4. ヒューマニズム組織の活動内容

続いて、社会運動としての反宗教思想の別の側面であるヒューマニズムについて分析を行う。ヒューマニズムは宗教という形式をとらずに、これまで宗教が行ってきた冠婚葬祭やコミュニティ形成などの役割を果たそうと試みるもので、それらの活動によって宗教を代替することを目指しているといえる。ヒューマニズムという語にも長い歴史があるが、以下に示すように現代のそれは「人文主義」と訳されるものとは大きく異なっている。

ヒューマニズムが無神論と区別されるのは、宗教を否定ないし批判することを主眼に据えている

わけではない点である。むしろ、ヒューマニズムは無神論を補う関係にある。というのも、とりわけキリスト教文化圏には宗教こそが道徳の基盤であるという考えが浸透しており、宗教を否定するならば道徳的に生きることはできないという批判がしばしばなされるからだ。そこで、無神論者が宗教に頼らずとも道徳的な生活を行うための試みとして、ヒューマニズムが模索されているといえる。

以下ではヒューマニズムを推進する組織の活動を、調査から得られた資料をもとに明らかにしていきたい。一つ目の対象は、米国ボストンのハーバード大学で活動するヒューマニスト・ハブである。この組織は、1974年に設立された「ヒューマニスト牧師会」が形を変えたもので、現在はハーバード・ヒューマニストコミュニティが運営している。

2016年3月13日に開催された「日曜講演」のプログラムは、組織の代表で「ヒューマニズムの牧師」でもあるグレッグ・エプスタインによる講話と、他の参加者の体験談によって構成されていた。「ヒューマニストのシンボルとしての不死鳥」と題されたエプスタインの講話の概要は以下の通りである。人生には良い時と悪い時があり、悪い時には不安に苛まれ、絶望することもある。そのような時には、不死鳥のように「蘇る」ことが必要であり、その再生によって人生を良いものにすることができる。このような講話の合間に、登壇者による体験談が差し挟まれる。いわく、近隣のマサチューセッツ工科大学に入学したが勉学がうまくいかず、就いた仕事にも満足できなかった。家の宗教や他の宗教に頼っても状況は改善されず、そのような時に出会ったのがヒューマニズムであり、現在は充実した生活を送っている。このような体験談を4人が語ったが、共通しているのは人生の行き詰まりと、それがヒューマニズムによって「救済された」というストーリーである。エプスタインはこうした体験談に不死鳥の蘇りの話を重ね合わせ、「駄目になっている時は自分のせいでもある」「成功しても満足してはいけない」などの教訓を述べた。

こうした講演会の内容から、ヒューマニズムがいかにコミュニティとして機能しているかが明らかになるであろう。登壇者の1人がギターを持ち出し、「ヒューマニストの音楽」として自作の歌を披露する場面もあった。また終了後には飲食を行いながらの談話の時間が設けられ、大勢の参加者が活発に交流していた。こうした講話と体験談の共有、他の参加者との語り合いによって、ヒューマニスト・ハブは一つのコミュニティを形成している。「ヒューマニズムは孤独ではない」「この組織は他人とつながりたいという根源的な欲求を満たしてくれる」という登壇者の発言からも、このことは明確である。

また、このような集会のあり様は、宗教におけるそれとも類似していると思われる。講話では「世俗的」という言葉がしばしば用いられ、既成宗教とは異なることが強調されていたが、とりわけ米国のキリスト教の活動手法に影響を受けているように感じられた。ヒューマニスト・ハブではこの他に、マインドフルネスなどを取り入れた「世俗的瞑想」や、「ハリー・ポッター」シリーズを聖書として読み、人生の教訓を引き出す読書会などを定期的に行っている。

このような集会を行っているのはヒューマニスト・ハブだけではない。同様のヒューマニズム組織である「サンデー・アセンブリー」も米国とヨーロッパを中心に現在92ヶ所にコミュニティを有している。2016年6月5日に英国ロンドンのコンウェイ・ホールで開催された同組織の集会では詩の朗読や音楽の演奏が行われ、昼過ぎに終了した後は立食パーティーの場が設けられていた。主催者によると、参加したのは約350人であった。

5. ヒューマニズム組織の儀礼実践

次に、ヒューマニズムの組織のもう一つの活動内容である儀礼の挙行について描写してみたい。

例として取り上げるのは英国ヒューマニスト協会による儀礼である。同協会のパンフレットによると、イングランド、ウェールズ、北アイルランドに計3百の儀礼挙行人がおり、主に命名式、結婚式、葬式の3種類の儀礼を執り行っている。「英国ヒューマニスト協会は、理性と人間性に基づいた、責任のある良い人生を求める無宗教の人々を援助し、そうした人の代表となっていない (Leaflet1)」と述べられているように、これらの儀礼は特定の宗教に属していない人を対象にしている。それぞれの儀礼に固定された手順はなく、ある程度は依頼人と相談して決めることになっているが、式次第の一例も記されている。命名式は子供の誕生を祝う儀礼で、「ヒューマニストの命名式は宗教的ではない形で、子供を世界に迎え入れることの喜びと驚き、責任について考え、認めるための機会を提供します (Leaflet2)」と説明されている。式では誕生までの過程の語りや、子育ての重要性や責任についての言葉、両親の宣誓などが行われた後に、子供の命名を行う。

次に、結婚式では2人の前史を語り、詩の朗読や宣誓を行い、両者の握手などの「象徴的行為」によって婚姻を確かなものにする。ここで注目すべきは、結婚を行うのが「男女」とは指定されていない点である。ヒューマニストの結婚式は異性・同性を問わずに行うことができるため、他で挙式を拒否された同性カップルに対する受け皿になっていると考えられる。このような形で行われている結婚式であるが、2016年現在英国ではスコットランドを除いて、ヒューマニストによる結婚式は法的に認められていない。そのため式を挙げた2人は、戸籍登記所に別途届け出を行う必要がある。

他方で葬式に関しては、宗教的なものと同等の法的地位が与えられている。式次第の一例は、「非宗教的な視点からの生と死についての考察」、故人の生涯についての語り、詩の朗読や音楽の演奏、黙祷、そして火葬ないし埋葬である。火葬ないし埋葬の形態についてはさまざまな種類があるため、以下では同協会刊行の葬儀手引書『神のいない葬儀』を参照し、ヒューマニストの葬式の詳細を明らかにしていきたい。同書によると、遺体は火葬か土葬されるのが主な選択肢だが、火葬の方がより多く行われている。火葬の場合、葬儀は火葬場で執り行い、一連の儀礼が終わった後、遺族は「引き渡し」と書かれたボタンを押す。これによって火葬が始められる。主な会場となる火葬場付属の礼拝堂には十字架や聖書が置かれていることがあるため、喪主の意向次第でこれを取り去ることができる。また一般に英国の火葬では遺骨は細かく砕くので、遺族は遺灰を受け取ることになる。遺灰は納骨堂などに納めるか、散葬するかを選択肢がある。次に土葬の状況を描写しよう。埋葬場所が公営墓地の場合は、隣接する教会で葬儀を行うことになるが、その他墓地や親族の自宅などの建物内で行うこともできる。教会での葬儀においても、必要であれば十字架やその他のシンボルは取り去ることができる。喪主のスピーチや黙祷の後に棺を墓に降ろしたら、参列者は花や土を投げ入れ、葬儀は終了となる。この2種の方法に加えて、「森の墓 woodland cemetery」と呼ばれるいわゆる樹木葬も提案されている。これは死を自然のサイクルの一部ととらえるためにヒューマニストにふさわしい方法だとみなされており、遺体を生分解性の棺に納め、野山に埋めて、墓石の代わりに樹を植えるという手順で行われる。

このようなヒューマニストの葬儀が、一般的なものといかに異なっているかを明らかにするために、英国における葬儀の現状を描写してみよう。誰かが亡くなると、遺族はふつう英国葬儀業組合 (NAFD) に属する葬儀社に連絡し、依頼された葬儀社は場所や人員の手配、遺体の運搬、埋葬に至るまでのすべてを代行する (松濤 2010: 176)。英国ヒューマニスト協会もこの組合に

加盟しており、そうした葬儀社の選択肢の一つとなっている。全般的な葬儀形態は、かつては土葬が主流だったが、1874年に英国火葬協会が設立されると教会への反発や墓地のための土地の不足から支持を集め、2005年には英国の火葬率は70%を超えるようになった（寺尾2008: 36-39）。また火葬後の遺灰が墓地や納骨堂に納められることは少なく、65%が公園墓地などに散葬されている（松濤2010: 177）。これらと比較すると、ヒューマン主義の葬儀も、遺体の取り扱いについては一般的なものと差はないことがわかる。異なっているのはむしろ、死者を送り出す際の参列者の意識である。

以上が、英国ヒューマン主義協会が行っている儀礼である。このような人生儀礼を執り行っているのは同協会だけではなく、スコットランドやアイルランドのヒューマン主義協会、米国の「ザ・ヒューマン主義・ソサエティ」も同様である。他方で、前述のヒューマン主義・ハブやサンデー・アセンブリー、および「米国ヒューマン主義協会」は行っておらず、すべてのヒューマン主義の組織が儀礼を提供しているわけではない。

6. 宗教の代替物としてのヒューマン主義

以上のように描写してきたヒューマン主義組織によるコミュニティ形成と儀礼実践の活動であるが、これらは既成宗教の影響を受け、活動面においてはそれらと同様の構造を有しているように思われる。事実、宗教を模倣した世俗的組織を作り上げようとする試みも存在しており、哲学者アラン・ド・ボトンの『無神論者のための宗教』では、たとえ無神論者でも宗教の良い面は積極的に取り入れていくべきだとしている。ここで挙げられている宗教の長所の一つが、「コミュニティの感覚」である。ド・ボトンは世俗化した近代社会において失われているのがこの他者とのつながりという感覚だとして、「宗教はわれわれの孤独について多くを知っているように思われる。たとえわれわれが宗教の語る来世や教義の超自然的な由来についてほとんど信じていないとしても、われわれをよそ者から隔てる要因についての宗教的理解や、普段われわれが他者とのつながりを形成することを妨げている偏見を消し去るための宗教的試みを称賛することはできる（de Botton 2013: 30）」と述べている。彼はこのような試みの例としてキリスト教のミサやユダヤ教の贖罪儀礼および成人式を挙げており、こうした儀礼がコミュニティの結びつきを強めるとしている。ド・ボトンは他にも宗教の長所として道徳、教育、芸術を挙げ、こうした長所を認め、それを積極的に模倣すべきだと主張する。彼の目標は、宗教の良い面を学んだ世俗的組織を作ることである。こうした組織が実現したものが、上記のヒューマン主義団体であることは理解できるだろう。前述したように、ヒューマン主義・ハブや英国ヒューマン主義協会は宗教団体と同様にコミュニティを形成し、人生の節目で儀礼を行っている。こうした点から、ヒューマン主義とは、非宗教的な組織によって宗教の代替を行う試みであるとみなすことができる。

おわりに

本稿では、無神論とヒューマン主義を掲げる組織の理念や活動内容について見てきた。最後に、これらの組織が示す欧米の宗教の変化が、日本における宗教の状況といかに関連しているかを示したい。

すでに述べたように、現在の「無神論」という語の定義には、神への信仰を有さない人も含まれており、この定義のもとでは、日本人の多くが「無神論者」であるということになる。国学院大学日本文化研究所と「宗教と社会」学会のプロジェクトが合同で、2015年に大学生を対

象に行った調査では、「信仰をもっていない」と回答した人の割合は88.4%にも及んでいる（井上 2015: 2）。しかし、この場合の「信仰」は特定宗教の信仰のみを指すと考えられ、「霊魂」や「パワースポット」の存在を信じている人はさらに多くなるため、日本と欧米の状況を単純に比較することはできない。欧米における調査とほぼ同一の質問である「神の存在を信じるか」については59.6%が肯定的な回答を与えている（Ibid.: 6）。一方で、積極的無神論者とみなせる神の存在を「否定する」回答の割合は10.4%で、これは前述の国際社会調査プログラムの結果とほぼ一致する（Keysar, and Navarro-Rivera 2013: 561）。

また、ヒューマニズムによる無宗教の人生儀礼は、それに近いものが日本でも議論されている。読売新聞が2012年に行った調査によると、結婚式について「無宗教の人前式」を行いたいとした未婚者の割合は25%で、既婚者のうちで実際に行ったのは12%であった（読売新聞2012/4/7）。また葬式についても、NPO法人「葬送の自由をすすめる会」などが、家族葬や直葬、自由葬と呼ばれる簡素かつ無宗教的な形態の葬儀を推し進めている。日本消費者協会が2014年に行った調査によると、「無宗教」の形式で行われた葬儀は4%で、これは5年前の1%から大きく増加している（SOGI 2014: 23）。

以上のことから、反宗教的思想の拡大や、それを掲げる組織の活動は、欧米の宗教の現状の変化を描き出しているだけではなく、日本における「無宗教」の議論とも関わってくるのが理解できるだろう。これらの組織についてさらなる調査を進めることは、現代の宗教の状況について多くの示唆をもたらすものになると考えられる。

参考文献

- Bullivant, Stephen. "Defining 'Atheism.'" In *The Oxford Handbook of Atheism*, Stephen Bullivant and Michael Ruse (eds). Oxford: Oxford University Press, 2013. pp. 11-21.
- Cragun, Ryan T. Joseph H. Hammer and Jesse M. Smith. "North America." In *The Oxford Handbook of Atheism*, pp. 601-621.
- De Botton, Alain. *Religion for Atheists: A Non-believer's Guide to the Uses of Religion*. New York: Vintage Books, 2013.
- Keysar, Ariela and Juhem Navarro-Rivera. "A World of Atheism: Global Demographics." In *The Oxford Handbook of Atheism*, pp. 553-586.
- Pew Research Center. "5 key findings about the changing U.S. religious landscape." (<http://www.pewresearch.org/fact-tank/2015/05/12/5-key-findings-u-s-religious-landscape/>, 2016年11月24日閲覧)
- Silverman, David. *Fighting God: An Atheist Manifesto for a Religious World*. New York: St. Martin's Press, 2015.
- Wilson, Jane Wynne. *Funerals Without God: A practical guide to humanist and non-religious funeral ceremonies*. 7th ed. British Humanist Association, 2014.
- (Leaflet1) *Funerals*. British Humanist Association, 2013.
- (Leaflet2) *Naming Ceremonies*. British Humanist Association, 2013.
- (Leaflet3) *Weddings*. British Humanist Association, 2013.
- 井上順孝編集責任『第12回学生宗教意識調査報告』、國學院大學日本文化研究所、2015年。
- 新村出編『広辞苑 机上版』、第6版、岩波書店、2008年。
- 寺尾寿芳「自然層の源流をキリスト教に探る」、中村生雄、安田睦彦編『自然葬と世界の宗教』、凱風社、2008年、13-45頁。
- 松濤弘道『改訂増補 世界葬祭事典』、雄山閣、2010年。
- 『SOGI』、表現文化社、140号、2014年。
- 『読売新聞』、読売新聞社、4月7日、2012年。